
魔王な彼女に虐げられるのはいつも俺

鳥居なごむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王な彼女に虐げられるのはいつも俺

【Nコード】

N9510X

【作者名】

鳥居なごむ

【あらすじ】

【異世界転生最強モノ】

焼きプリンを食べたという理由で無理心中させられた神崎蓮は、獣人やエルフで栄える「グランシエル」という異世界に転生する。魔王との奴隷契約によって最強の魔銃士となった主人公が頑張る話です。

【追記】

幕間は本編のバックストーリーを「三人称」で書いています。章ごとの幕間が一つの物語になっている仕様で本編より一話一話が長

めに設定されています。更新する度に「お気に入り」が減ったりもしたけれど――私は空元気です。

過去も未来も頭の中にしか存在しない。目の前にあるのはいつも現在だけだ。

ルオニト・マギ「ある朝の光景」 鳳凰曆七〇一年

この世界に生まれて十六年半の月日が流れていた。

この日、俺は運命の再会を果たすことになる。

アラバスタ共和国の南西に広がる砂漠地帯。

大地は見渡す限り赤い砂に覆われている。一部の生命体しか生息できない不毛地帯だ。一陣の風が吹くだけで視界は完全な朱に染まるだろう。そんな砂漠の中を俺は無我夢中で駆け巡っていた。一歩踏み出す度に戦闘用長靴が赤い大地に飲み込まれていく。目標と遭遇してから数分しか経過していないというのに息が上がり始めている。どうやら砂地の激走は想像以上に体力の消耗が激しいらしい。

「巨大砂蚯蚓サンドワームも倒せないようにやら、単独で世界を旅するにゃんて夢のまた夢にゃ」

大きな岩の上に腰を下ろした猫系獣人族の女――ハシユシユは起用に尻尾を使いながら林檎を齧った。胸元と下腹部を布で隠すだけという戦闘とは無縁の格好をしている。顔立ちと長身痩躯な体型は魅力的なのだが、頭に生えた猫耳と腰の尻尾、おまけに言葉の節々に「にゃ」と付けるので締まらない。元魔銃士の孤児院保母で俺の師匠と呼ぶべき存在である。

魔銃士。

魔術が封入された魔弾を撃ち出せる銃の専門家である。主に中距離から長距離を得意とし、攻撃から補助まで状況に即した行動が可能だ。魔弾には口径によって第一式から第七式までの階級があり、数字が高くなるほど強力な術式が封入されている。第三式までの小口径は両腰に提げた回転式と自動式の魔弾銃を使用し、第四式以上の大口径は背中に担いだ強襲用狙撃魔弾銃が必要になる。

「砂中から引きずり出さない限り勝ち目はないにや」

「そんなことは言われなくてもわかってますよ！」

俺はハシシュの助言に文句を返しながら後方を振り返った。赤い砂を舞い上がらせながら標的が地中を猛進してくる。ぎりぎりを見計らって俺は迫る砂塵を横っ飛びで回避。勢いのまま前方へ一回転して素早く起き上がる。右手で帯革に装着した回転式魔弾銃を引き抜き砂中へ発砲。着弾と同時に封入された第三式の風属性魔術が発動する。

刹那——巨大な砂柱が天へ向けて舞い上がった。俺は六発目を撃ち終えた魔弾銃から空葉莢を排出。風属性の魔弾を専用器具を用いて六発同時に装填する。撃鉄を起こして初弾を薬室へ送り込みながら俺は周辺への警戒を強めた。

不意に近場の赤い大地が大きく盛り上がる。その中から獲物を丸飲みにする巨大な口と無数の牙だけを有した巨大砂蚯蚓の頭部が姿を現した。粘着力の強そうな涎を滴らせながらこちらに敵意を向けてくる。

「ひゅー」

口笛を吹けないのかハシシュはそれっぽい声で発音する。無言

で座っていたら画になる美形だけに残念だ。俺は魔弾銃を構え直して巨大砂蚯蚓と対峙する。いきなり襲いかかって来ないのは魔物にも本能的な警戒心があるからだろう。

ここは先手を取るべきかもしれないな。

ゆっくりと俺は左手で自動式魔弾銃を帯革から抜き取る。派手な演出を望んでいるわけではなく、魔術を扱えない魔銃士にとって二挺提げは珍しくない。唯一無二の武器である銃と弾薬の数がそのまま生死を分けるからだ。愛銃一丁で魔物に挑むのは銀幕の中の主人公だけでいい。

まずは左手に構えた自動式魔弾銃で火属性の魔弾を放つ。それから右手の回転式魔弾銃の引き金を絞り風属性の魔弾を発砲。中空で術式を展開し始めた火属性の魔弾に風属性の魔弾が絡む。二つの術式は魔術反応を引き起こして紅蓮の炎を錬成。標的の醜惡な容貌を渦巻いた灼熱の炎が焼き払う。

「ブオオオオオオオオオオーッ！」

大地を震わせるような咆哮を発しながら巨大砂蚯蚓は砂中に潜り込む。消火目的か怒りで我を見失っただけなのか判然としない。俺は神経を研ぎ澄ませて警戒に集中する。赤い砂が盛り上がり再浮上した標的は唐突に巨大な口から唾液を吐き出した。

「うおっ！」

今度は俺が悲鳴に近い声を発して逃げることになった。気持ち悪いだけならともかく、巨大砂蚯蚓の唾液には硫酸と似た性質がある。つまり水と混合すると超高熱を発生させるわけで、構成要素の七割

が水分の人体には怖ろしく危険な代物だ。

さっきまで俺のいた場所に唾液が撒き散らされる。俺は砂の上を横転しながら作戦を練り直していく。持久戦は体力が持ちそうにないので却下。短期決戦なら巨大砂蚯蚓の弱点である風属性の第五式魔弾を使うべきだろう。経費削減も命あつての物種だ。

俺は立ち上がり回転式魔弾銃と自動式魔弾銃を帯革に差し込む。その代わり背中に担いだ大口径魔弾銃を取り出して両手で構えた。有用と判断したのか巨大砂蚯蚓は再び口内から唾液を吐き出してくる。

超反応で横へ倒れ込んで液体を回避し、俺は砂の上に伏せた状態から大口径魔弾銃の引き金を絞ろうとした。直後に眼前の赤い砂が盛り上がり銃口を撥ね上げられる。尻尾？ 軌道修正を余儀なくされた第五式魔弾は中空で無数の風による刃を形成して空の彼方へ消えていく。

「糞っ垂れが！」

好機と判断したらしい巨大砂蚯蚓は赤色の砂を巻き上げながら距離を詰めてきた。無数の牙と大口を開いたまま襲いかかってくる。

「悪いな。俺の武器は魔弾銃だけじゃないんだよ」

俺は帯革に提げた手投げ用魔榴弾を標的の口中へ向けて投擲。次いで風属性の魔弾が込められた回転式魔弾銃を抜き取り発砲。強烈な突風が俺と巨大砂蚯蚓の距離を引き離れた。

その直後、標的の体内で魔榴弾が火属性の術式を展開。高熱の炎が瞬間膨張して巨大砂蚯蚓の頭部を吹き飛ばした。気持ちの悪い肉片と体液を周辺に撒き散らし、指揮系統を失った胴体は鈍い音を立

てて砂上へ崩れ落ちる。

「ふーっ！」

盛大に息を吐いて俺はその場に座り込んだ。見学していたハシユシユが岩から下りて近付いてくる。猫系獣人族特有の容貌としなやかな肉体美が年齢を感じさせない。師匠は御座なりな拍手をしながら感想を口にする。

「この調子にやら期日に旅へ出られるかもしれにゃいにゃ」

そう——俺は一刻も早く大人になりたかった。

この世界では十七歳が一人前の条件とされている。十七の誕生日を迎えれば酒も煙草も賭博も自由だ。世界を股にかけて冒険することも本人の意思に委ねられる。あと半年の辛抱で俺は大人として彼女を探す旅へ出ることができるのだ。

「しかし魔銃士は金がかかり過ぎるのが難点ですね。節約しているつもりなんですけど、一向に旅の資金が貯まらないんですよね」

「あたしに愚痴を零されても困るにゃよ。それに各地の魔物を倒しながら進めば魔弾の補充と旅費くらい出るにゃろ？」

「他人事ですねえ」

「他人事にゃからにゃ」

俺は師匠の無計画さに無然としてしまう。恩返しも兼ねて緩んだ頭の螺子を締めてあげたい。

突如——遠くから轟音が聞こえた。アラバスタ共和国内の工業地区なら気にも留めないが、この見渡す限り赤い砂に覆われた砂漠地帯ではそうもいかない。

「なんですか今の？」

「にゃにゃにゃ、ひよっとすると不滅竜かもしれないにゃ！」

「不滅竜？」

俺の疑問を無視してハシユシユは額に手を当てて遠くを見る。
尻尾が上に向かって伸びているので相当興奮しているのだろう。俺は立ち上がり魔弾銃から砂を振り払って背中に担ぎ直した。なんとなく師匠の眺めている方向へ視線を移しておく。

再び遠くで轟音が響いた。

「間違いなさそうにゃ。不滅竜が暴れているにゃよ」

「だから不滅竜ってなんですか？」

「この赤い砂漠の主にゃ！」

ぴくぴくと耳を動かしながらハシユシユは告げる。相変わらず残念可愛い師匠だ。

不滅竜。

全長五十メートルを超える巨大な砂蛇。不死を連想させる名は討伐しても数日後には目撃されることに由来しているらしい。簡潔に説明を終えたハシユシユは真剣な面持ちで問いかけてくる。

「どうするにゃ？」

「行くしかないでしょう」

「近付くだけでも危険にゃよ？」

「それなら尚更ですよ」

わざとらしいくらい俺は盛大に肩をすくめた。

大地を突き上げて巨大な体躯が空へ舞い上がる。緩やかな放物線を描いて再び大地へ落下すると不滅竜は赤い砂を巻き上げた。まるで海を泳ぐかのように優雅な動きを繰り返している。

「……すげえ……」

眼前の光景を眺めながら俺は呆然と感想を吐露していた。

「交戦中かもしれないにゃ」

傍らに立つハシユシュが怪訝そうな表情を浮かべる。改めて周囲を確認してから俺は語尾の所為で緊張感の欠片もない師匠に聞き返した。

「それらしい集団は見当たりませんよ？」

「そうにゃんだけど不滅竜の動きが活発過ぎるんにゃよ」

「普段はもっと大人しいんですか？」

「にゃんとまあ」

俺の質問を完全に無視してハシユシュは素っ頓狂な声を上げた。仕方なく視線の先を辿ると瞳に人影が映り込む。種族は判然としなが長い黒髪に黒装束を纏っている。魔術あるいは魔導具を使用しているのか規格外の跳躍を重ねて不滅竜を翻弄していた。まるで攻撃を避けながら特定の場所へ誘導しているようにも見える。

「どこかへ連れ込んで倒すつもりなんですかね？」

「さあにゃ、常闇の魔女が考えることにゃんてわからにゃいさ」

師匠の口から不吉な言葉が零れ落ちる。口調はともかく鋭い眼光が真実を訴えていた。

常闇の魔女――八英傑の一翼を担う闇属性を極めた魔王アーシェス・バラライカの通称である。七日間で世界を闇に葬り去れる魔力を持つと称されているが、これはもう魔王を表現する際の枕詞のようなもので、果たしてどこまで事実在即しているか誰にもわからない。

「師匠は常闇の魔女と面識があるんですか？」

「あるわけないにゃ。神聖イージス王国の祭典で遠目から見たことがあるだけにゃよ」

「それじゃあ、初顔合わせということで挨拶くらいしておきますか？」

「ふざけるにゃ！」

ハシュシュは地団駄を踏んで声を荒げた。しかしそんな怒声さえも語尾の所為で「あら可愛らしい」といった風情である。

他愛ない質疑応答を繰り返していると次第に轟音が大きくなってきた。いくら見晴らしのいい砂漠地帯とはいえ、人影が視認できる距離なのだから、おそらく数百メートル程度しか離れていなかったのだろう。

こちらへ向かってくる常闇の魔女とその背中を追う不滅竜。

「早く死んだ演技ふりをするにゃ！　今から逃げても手遅れにゃ！」

そう言い残して師匠は事切れたように赤い大地へ突っ伏した。超残念可愛い。しかしハシュシュの奇怪な行動を楽しんでいる場合ではなさそうだった。俺は背中アサルトレイターの強襲用狙撃魔弾銃を取り出して空薬莖を排出。新たに五十口径の大型第五式魔弾を装填。遊底を引きな

がら俺は死んだ演技中の師匠に歩み寄る。常闇の魔女あるいは不滅竜の脅威が飛び火したら風速百二十メートルの強風を発生させて文字通り逃飛行だ。

しかしその予定は一瞬で崩されてしまう。なぜなら眼前に着地した常闇の魔女——俺と年端の変わらないアーシエスの顔に見覚えがあったからだ。先の尖った耳に彫刻のような造形美。怜悯な視線でこちらを一瞥した魔女は長い黒髪を揺らして再跳躍の体勢に入る。

「待ってくれ！」

思考するよりも先に俺の口は言葉を紡いでいた。跳躍を保留した魔女は緩やかに顔を上げる。種族がエルフになっていても面影は失われていない。やっと——見つけた。十六年半もの月日を費やしてしまった。いや、たった十六年半で巡り会えたのだから俺は運がいいのかもしれない。

「フオオオオオオオオオオオン！」

砂中から顔を出した不滅竜が咆哮する。アーシエスは美貌を歪めて舌打ちした。それから言語とは異なる文字の羅列を紡いでいく。次の瞬間、魔女の左腕から黒煙が発生。魔力解放の影響か顔に悪魔のような蠱惑的な紋様が浮かび上がっていく。

アーシエスは素早く左腕を肩の高さまで掲げた。

「——影縫い——」
シャドーバインド

中空に黒い魔術組成式——禍々しい闇の魔方陣が描き出される。即時発動型の「影縫い」は一瞬で不滅竜の影を射抜き拘束した。

「フオオオオオオオオオオン！」

動きを封じられた不滅竜は再び咆哮する。魔女は優雅な所作で両腕を左右に広げた。それぞれに描き出された二つの魔術組成式を頭上に移動させて連結。アーシエスは口の端を上げて悪戯な笑みを浮かべる。

「――^{ダンテ}亜空間消去――」

第七式の超高位魔術を無詠唱で発動。不滅竜の背後に現れた時空の歪みが次第に拡がっていく。生み出された円形の無は直径十メートルまで大きくなると強力な引力を発生。不滅竜の巨軀を赤い砂と一緒に飲み込んでいく。俺は師匠の身体を抱き寄せながら魔女の腰に手を回して無から生じる引力に耐えた。

無が不滅竜を飲み込む光景は地獄絵図に等しかった。

すべてを無に還すと時空の歪みは消失。

緊張から解放された俺は胸を撫で下ろした。

「私の身体に無断で触れるなんて随分と大胆ね」

「いきなり危なかった魔術を使うからだろう！ 一歩間違えたら俺と師匠まで死ぬところだったぞ！」

蠱惑的な紋様の消えたアーシエスは不思議そうに小首を傾げる。

「私を呼び止めたのはあなたでしょう？」

「うぐ」

正論を返されてしまった。確かに俺が呼び止めなければ起こらな

かった騒動である。

「まあ、いいわ。私は寛容だから許してあげる」
「……………」

本当に寛容な奴はそんなこと言わないけどな。

「なんとか不滅竜を生け捕りにしたかったのだけど、それはまあ、次回以降の楽しみということにしておきましょう」

アーシエスは赤い大地を見渡しながら呟いた。

「悪かったな。予定を狂わせてさ」
「予定は未定だから楽しいのよ」

少し陰湿そうな性格まで誰かさんと瓜二つだった。
ともかく俺は眼前の魔女を改めて見やる。白銀髪が多いエルフ族の中では珍しい黒髪。闇属性を極めた魔王。他人の空似というには条件が揃い過ぎている。しかし事実を語ったところで信じてもらえないだろう。

だから俺は正攻法で気持ちを伝えることにした。

「あと半年経ったら俺は旅に出る。世界のどこかで、また会っても
らえるか？」

「どうして私に会いたいのかしら？」

「アーシエスに惚れたんだ」

「あら、随分と嬉しいことを言ってくれるのね」

くくくとかみ笑いをして魔女は語を継ぎ足した。

「これから一年半後、八英傑の集結する祭典があるわ」

旅に出られるようになってから一年後の世界である。

「その場所へ向かえば会えるわけか？」

「そうね——ただ覚悟は出来ているのかしら？　ほかの八英傑が私のように温厚とは限らないわ」

「覚悟なら生まれる前から出来ているさ」

そう——今ここにいることが覚悟の表れだ。

「あなた見込みがありそうね。私と契約して専属の奴隷になりなさい」

黒衣の魔王アーシエスは堂々と宣告した。俺は傍らで死んだ演技中の師匠を見やる。ハシユシユは寝息を立てながら居眠りしていた。この状況で眠れるとかどんな神経しているんだろう？

しかしまあ、そんな些細な出来事はどうでもいい。

私と契約して専属の奴隷になりなさい。

理不尽極まりない無茶苦茶な要求。だからこそ俺は確信を持って断言できる。

これが俺と彼女の記念すべき再会だった——と。

「あらあら私としたことが——あなたの名前を聞いていなかったわ」
「ロンだ。ロン・ラズエル」

まずは十六年半前——今となっては昔話にしかない過去を語るでしょう。

人生。

神が創造した多人数同時参加型の世界。

もし人生をゲームに例えるなら、次のような長所が挙げられるだろう。

「すべての登場人物が深い人間性を持っている」

「グラフィックが綺麗でBGMも無限大」

「信じられないくらい複雑で洗練された物語」

しかし人生にはゲームとして決定的な欠陥があった。

一つ、性別を選択できない。

一つ、容姿の選択あるいは造形ができない。

一つ、初期状態に圧倒的な差がある。

かなり極端な例を挙げれば、働かなくても暮らせる国と、四秒に一人ずつ死ぬ国が存在する。どこに割り振られるかは無作為で選択の余地はない。くだらない理由でくだらない差別が発生し、搾取する側と搾取される側が明確に分けられた世界だ。これはもう糞ゲーか無理ゲーとしか表現しようがない。

「それでさ、次、どれにする？」

ふわふわと思考の波を漂う俺に神と名乗る声が再び問いかけてきた。なにも存在しない真っ暗で穏やかな空間。知覚とは異なる感覚が脳に情報を送り込んでくる。様々な世界の設定や参加人数。その中に『人生』も含まれていて、俺は拍子抜けを通り越した感情に苛

まれていた。

「あの、一つ質問してもいいですか？」

俺は姿を確認することもできない神に声をかける。

「構わんよ」

「俺と一緒に死んだ『桐原彩奈』という女性はこの世界を選択したんですか？」

数瞬の沈黙。やがて神の声は世界の名称を告げた。

「『グランシエル』だな」

曰く科学ではなく魔法の発展した世界。エルフ族が栄える神聖イージス王国、人族と猫系獣人族が共存するアラバスタ共和国、大柄な熊系獣人族と妖精族が築いたアルマダ連邦、三国は覇権を争いながらも世界平和のために同盟を結んでいる。魔術には土・水・風・火・氷・雷・光・闇と八つの種類が存在し、それぞれの頂点に属性を極めた英傑と呼ばれる魔王が君臨しているらしい。八英傑の持つ魔石をすべて集めた者はどんな願い事でも三つだけ叶えてもらえるという。うーん、どうして彩奈は『グランシエル』を選択したのだろうか？

しかしまあ、そんなことはどうでもいい。彩奈が選択した世界に転生する。この点に関して俺の辞書に躊躇の二文字は存在しない。

「俺もその『グランシエル』にします」

「ふむ。先に言っておくが『人生』の記憶は初期化されるぞ？」

「それでも行き先に変更はありません」

「承知した。必要事項の記入を済ませれば新しい世界の始まりだ」

頭の中に質問と選択肢が表示される。どうやら動作する必要はなく、思考するだけで選択肢が消えていく。グランシエルという世界は、人生に比べると初期設定が自由だった。性別と種族に所属する国家、その結果を受けて基礎能力値が決定し、そこから伸ばしたい分野に与えられた数値を割り振る。俺は迷うことなく「知能」に全数値を放り込んだ。勉強ができるかどうかは別として、やはり根本的な知能は高いほうが望ましい。

最後に現れたのは能力を選択してくださいという指示だった。

ゆらゆらと思考の波を回遊しながら俺は一覧表に目を通していく。なにやら「特技」と「特性」の二種類があつて、前者は「使用」するもので後者は「常時発動」らしい。とりあえず頭の中に流れている膨大な情報から一つを選んで閲覧した。

『川越スマイル』特技。

キメ顔を作ると料理の味以前に美味しいと言わざるを得ない雰囲気醸し出すことができる。

「料理は上手くならないのかよ！」

つついっ突っ込んでしまう俺がいた。というかこれ訴えられても文句を言えない能力名と効果だな。とはいえ損する要素はないから候補の一つだな。

『修造スタイル』特性。

攻撃力と俊敏性が大幅に上昇する。ただし周りが引くほど熱い漢になってしまう。

お、この能力は悪くないな。しかし固有名詞使い過ぎだろ。ただ俗世に塗れた神だよ。

「配慮したつもりなんだがな。意味のわからない言葉で説明されるより『人生』で親しみのある単語を用いたほうが理解しやすいだろう？」

「心の声が聞こえている！」

「まあ、ここは我の世界だからな」

ふむ。そう言われると納得するしかない。

しかも冷静に考えれば確かに気の利いた配慮である。能力名だけである程度の予測が可能だし、なにより映像として瞬時に想像できるからな。俺は思考の海に潜り情報を取捨選択していく。もっとう、はつきり使い勝手のいい能力はないものだろうか？

『テンプレーション』特性。

不思議な香りを発して同性を虜にすることができる。

「頼むから異性を魅了してくれ！ 残念過ぎる！」

『アンリミテッド』特技。

発動することで限界突破の力を得られる。ボルトよりも速く走れるし、ブブカよりも棒なしで高く飛べる。

「おおーっ、この能力使えるな」

＊ただし使用する度に正気度が下がる。

「いきなり使えなくなったーっ！」

叫ばずにはいられなかった。

「静かに選べないのか？」と神に怒られる。

「……すいません」

「反省すればそれでいい。あと悩むのは一向に構わないが、どんな能力を選んだかは記憶に残らないからな。才能を無駄にする可能性は『グランシエル』も『人生』も一緒だ」

確かに趣味や目指すものが才能と一致する確率は天文学的な数値だろう。

それにしても前回の俺はなぜ『人生』なんて過酷な世界を選択したのだろう？ ほかに楽しめそうな世界なんていくらでもある。もし回答を得られる機会があるというのなら、それはそれで大きな変化の一つになるのかもしれない。

さてと閑話休題。

俺には大学進学を機に同棲を始めた、高校二年から丸三年付き合っている彼女がいた。しかし順風満帆に進んでいた日々は唐突に終止符を打たれる。事件はあの日、俺が冷蔵庫の中にある焼きプリンを食べたことで発生した。

深い闇の中で目を覚ました。

「……………」

ぼんやりと意識が回復して後頭部に痛みを覚える。患部に触れようとしても腕が妙な位置に固定されていて動かせない。どういう状況に陥っているのかも理解できないまま時間だけが過ぎていく。周囲は真っ暗で目が慣れても視界は黒から変化しない。しかし置かれている環境は少しずつ解けてきた。まず俺の身体は四本足の椅子に着席させられた状態で縛られている。両足は左右それぞれ椅子の足と固定されていて、両腕は背凭れの側面に沿うように固定されていた。

どれくらい経ったのだろう。

室内に光が照らされて明るくなった。特に眩しかったわけでもないのだが、反射的に顔を逸らして瞳を閉じてしまう。そんな俺を嘲笑うかのように声が降り注がれた。

「あらあら、こんなところで一体なにをしているのかしら？」

「正直なところ俺自身が一番よくわかっていない」

俺は声の主に素直な感想を返した。木製の椅子に身体を固定されているので、いつものように肩をすくめることさえできない。俺を監禁した相手は長い黒髪がよく似合う美少女だった。

「そろそろ俺の置かれている状況を説明してくれないか？」

「そうね」

言いながら身動きの取れない俺の姿を楽しむように声の主はゆっくりと周辺を巡回する。こういう弱者を虐げる状況を楽しめる奴の思考もよくわからなくて怖いのだが、どちらかと言えばそういう演出が似合い過ぎていることにより強い恐怖を覚えてしまう。露骨に胸を強調した服装に身を包んだ美少女は妖艶な笑みを浮かべた。

ちなみにこの美少女——桐原彩奈は俺の彼女である。

「ぐわっはっは、私は闇の世界から刺客として送り込まれた暗殺者だったのよ」

「そんなご都合主義が許されてたまるか！　　というか完全に棒読みじゃねえか！　　せめて騙してやろうという意気込みくらい見せたらどうなんだよ！」

「あらあら、身体の自由を奪われても突っ込みの自由は許されるというわけね」

そんな台詞を紡ぎながら彩奈は俺の背後に立った。もういろんな意味で嫌な予感しかない。妙な沈黙が不安を煽り立てていく。捕虜の精神状態というのはこういう感じなのだろうか？

「えい」

それはとても可愛らしい声音だった。しかし背中を強く押された俺は抵抗することもできず床に顔面を強打する。しかも椅子に固定されているので、その後も額と両膝で身体を支えるという格好だ。なんとか身体を横に倒して話のできる体勢に持っていく。

「……説明もしてくれないのかよ？」

「それは強制膝枕マシンよ」というどうでもいい説明をされた。
「強制という言葉の所為で膝枕という魅力的な単語がまるで活かされてないぞ！　あと木製の椅子にマシンとか機械的な呼び名を付けるな！」

「そんなことはどうでもいいのよ」

すべてを否定する発言を済ませてから、彩奈は床に転がる俺の頭を持ち上げて膝の上へ導いた。本当に強制膝枕マシンだったらしい。ともあれ飴と鞭を使い分けられている今の状況が本気で意味不明だ。

「意味がわからないという顔をしているわね」

「そりゃそうだろ！　この状況を理解できる奴は存在しない！」

喚く俺の頭を撫でながら黒髪の美少女は言葉を紡いでいく。

「冷蔵庫の中で私の帰りを心待ちにしていたプリンを食べたでしょう？」

俺は記憶の引き出しを無我夢中で開け捲くる。

「……確かに食べた。それで俺を拉致監禁したのか？」

「食べ物への恨みは怖いって言葉知ってるかしら？」

「まあな」

そして今現在、激しく体験している。

「二時間も並んで購入したプリンを食べられた私の気持ちかわかる？　家に帰るのが楽しみで楽しみで柄にもなくマンションの管理人

さんに『こんばんわ』とか挨拶しちゃったのよ」

「……………」

返す言葉もない。というか挨拶は普通にしようよ。

「ともかく今度は俺が並んで買ってくるよ。それを彩奈が食べるってことでどうだろう？」

「それは駄目よ。だって蓮に次なんてないんだもの」

「次がない？」

俺は意味がわからず言葉を繰り返した。一体どういうことだろう？

「文字通りの意味よ」

言いながら黒髪の美少女は椅子ごと俺の身体を起こした。癒しの時間が終了したのかもしれないし、単純に膝枕が疲れただけなのかもしれない。ともかく俺は椅子に着席して拘束されているという初期の状態に戻った。

「蓮を殺して私も死ぬわ」

「あの……彩奈さん？」

俺が彩奈の名を呼んだのは発言に文句があったからではない。なにを思ったのか黒髪の美少女は固定された俺の膝の上に跨ってきたのである。つまり俺の眼前には見事に実った禁断の果実が二つあった。

「なにかしら？」

結構な金額が発生する大人の店でしか行われていないような過激

な体勢をしているくせに、彩奈は澄ました表情を崩さないまま俺の肩を掴んで身体を後ろへ反らした。

「この体勢は……どうにかならないのか？」

いろんな意味で正常な判断が下せなくなる。しかし黒髪の美少女は気にする様子もなく告げた。ある意味でこいつはとんでもない大物なのかもしれないな。

「最期くらいデレておくべきでしょう？」

「いや、これはもうデレじゃなくてエロだ！」

「デレを一足飛びしてエロということでもいいじゃない？ どうせ蓮の最終目的は『ピーッ！』を『ピーッ！』して『ピーッ！』したいだけでしょう？」

酷い放送禁止用語の連続だった。

「結果より過程が大事なんだよ！」

「その過程が長々と牛歩展開になったら怒るくせに身勝手だわ」

鋭い指摘だった。

「……そうですね」

白旗宣言。これはもう勝てる気がしない。所詮俺なんて単なる童貞野郎ですよ。

「俺を殺すのはともかく、彩奈まで死ぬ必要はないんじゃないか？」
「なにを言っているの？ 蓮のいない世界に未練なんてないわ」

本当に嬉しいことを言ってくれるよな。しかしそれならどうして俺の殺すんだろう？

「なんか矛盾してないか？」

「そうかも」

随分と気楽な口調が返ってくる。だから俺は説得を試みることにした。

「俺と違って彩奈は両親や親戚がいるんだから、突発的な行動を起こして迷惑をかけないようにしろよ」

「蓮」

俺の名前を呼んでから彩奈は悪戯な笑みを浮かべる。

「こういう常軌を逸した状況で、そういう常識的な発言は非常識だわ」

「……………」

「でもまあ、非常識な提案をしているのは私だから謝る必要なんてないわね」

確かにな。

「それにしても——蓮は死が怖くないの？」

明らかに黒髪少女の声色が変化していた。真剣な質問なのだろう。だから俺は正直な気持ちを吐露しておく。

「桐原彩奈が惚れた神崎蓮は——こういうとき見苦しく命乞いする男じゃないだろ？」

「なにそれ……超格好いい」

そんな恋する乙女みたい瞳で俺を見るな！ 恥ずかしいだろ！

「あのさ、自殺とか殺害の方法は考えてあるのか？」

「睡眠導入剤を使って、それから致死量の薬を飲むわ」

即答だった。どうやら準備万端の本気らしい。

「しかしあれだな。焼きプリン一つで殺されるなんて無理ゲーもいいところだ」

「あら、その認識は間違っているわ。私は焼きプリンさえ横取りしなければ簡単に攻略できるキャラよ。たった一つしか存在しないバッドエンドのフラグを立てるなんて流石ね」

本当に口の減らない女だった。俺を貶めるためなら自らの価値さえ下げるんだよな。

「少し時間を頂戴」

そう言い残すと彩奈は俺の膝上から下りた。そして不敵な笑みを浮かべながら隣の部屋へと歩いていく。しばらくして戻ってくると、どういうわけか手に角材が握られていた。

「準備完了よ」

どういうわけか黒髪の美少女は豪快な素振りを披露した。なんか甲子園とか普通に連れていってくれそうな雰囲気がある。

「いや、あの、彩奈さん？」

「なにかしら？」と再び素振りをする彩奈。

「睡眠導入剤はどこですか？」

「失礼。睡眠導入材の間違いだったわ」

したり顔の彩奈だった。俺としては全力で突っ込むしかない。

「上手いこと言った感じになってんじゃねえよ！ 単に角材で俺を殴り殺すだけじゃないか！ 違うっていうならなにか反論してみろよ！」

「まあ、それについては否定しないわ」

「否定しろよ！」

再び突っ込む俺に対して黒髪の美少女は優しく微笑む。

「好き好き大好き超愛してるという気持ちの裏返しで、つつい他者に対してどれだけ辛く当たれるかを蓮で試してしまうのよ」

「違う！ 他者に対して辛く当たるための免罪符として好き好き大好き超愛してるって言ってるだけだ！」

「……………」と沈黙する彩奈さん。

「だから否定しろよ！」

「生まれ変わったら健気な性格になっちゃったりして？」

「それはそれでつまらないな」

退屈で堪らなかった毎日から俺を救ってくれたのが彩奈だからな。

「私の身勝手に付き合わせてごめんなさいね」

ぼそりと消え入りそうな声が聞こえる。それから彩奈は「もし文

芸部の女子高生がスラッガーになったら」とか言い放ちながら叫ぶ俺の後頭部を角材で振り抜いた。それって単純に野球部の男子が自己嫌悪に陥るだけだと無我の極致で突っ込みを入れておく。

こうして俺は人生に幕を閉じた。彼女がこの世界において「未来視」という能力を有していたと知るのはもっともっと先の話である。

しかしなんというか事故死や病死に比べてれば、愛する人に撲殺された俺は幸せなのかもしれないな。いや、そう考えてしまう時点で根本的な部分が間違っているのだろう。それでもまあ、幸せの形なんて人それぞれということで理解願いたい。

私が最も怖れるのは汚れなき善意である。

善意によって引き起こされた不幸な結末ほど手に負えないものはない。

ルオニト・マギ「ある晴れた日のこと」 鳳凰暦七〇二年

かくして新たな生命を受けた俺は、いきなり一方的な別れを宣告されて橋の下に捨てられた。本来なら覚えているはずのない出来事だが、どうやら俺は『人生』の記憶を引き継いだままグランシエルに転生したらしい。あの適当そうな神なら記憶消去を忘れるとか普通にあるさうだから気にもしなかった。

アラバスタ共和国の孤児院に拾われた俺は、成長の過程で言語と国独特の習慣などを覚えていく。このとき『人生』の記憶が役立つこともあれば、また逆に『人生』の記憶が邪魔になることもあった。もっと端的に表現すれば『人生』の経験則を払拭できなかったのである。

例えば思考の過程だ。

おそらく俺は『グランシエル』脳ではなく『人生』脳で物事を考えている。だからと言って特段困ることはないのだが、やはり本能的な反応に関して違いが生じているかもしれない。左利きの人が右手を使えるように矯正しても、咄嗟の判断を求められたとき左手が出るような感覚に近いだろう。

孤児院には人族と猫耳と尻尾を生やした獣人族の保育士が数名い

て、人族と猫系獣人族の孤児が分け隔てなく育てられていた。魔術の才能を有していなかった俺は、持ち前の知能を最大限に活かして、かなり早い段階から魔導工学の勉強を始める。そもそもアラバスタ共和国は工業の盛んな国で、魔導工学の研究でも人族を中心に他国を圧倒し、天駆ける魔導船「飛空挺」の開発にも成功していた。

中等科を無難に卒業した頃には、アラバスタ共和国の基本的な仕組みを理解していた。人生の記憶がなければ新鮮だったかもしれないが、選んだ種族が人ということもあって、年を重ねることに大きな変化は感じられなかった。唯一の違いは科学が魔術あるいは魔導力に置き換えられていることだろう。しかしそれも驚愕するような衝撃は受けなかった。飛行機が科学で空を飛ぶのに対して飛空挺は魔導力で空を飛ぶというだけのことである。

そして魔王アーシエスと契約を結んだ俺は、十七の誕生日を迎えるまでの半年間、ハシシュを伴い賞金を稼ぐ旅に出ることになった。この理由については後述するとして、今現在、俺は孤児院の広間で師匠待ちをしている。部屋の隅に簡素な長椅子が二つ設置されているだけで、だっ広い空間では保育士が孤児たちと戯れていた。

「うーん、最初は情報収集を行ったほうがいいんじゃないかじゃ？」

幼馴染みである猫系獣人族の少女――ミーシャは尻尾を器用に使って林檎を頬張る。手癖が悪く幼少期は俺もよく食べ物を盗まれたものだ。しかし犯行の証拠を突きつけると「にやうにやう」と口籠もり、すぐに「ごめんなさいにゃー」と謝る可愛らしさも持ち合わせている。この愚直さが人族と共存できている理由かもしれない。それにしても大事な部分だけ隠しているという格好なので、ついつい発育のいい胸元に視線が向かったしまうのは男の性だろう。

「にゃにゃ、なにか間違ったこと言ったかにゃ？」

ぴくぴくと可愛らしい耳を揺らしながら、ミーシャは無言の俺に困惑している様子だった。人族に比べて頭が弱い自覚があるらしく、こちらが怪訝そうな表情を浮かべると過剰な反応が返ってくる。ちなみに十七の誕生日を迎えて旅立つとき、まずはなにをすべきかという話題だったので、猫耳少女の発言は最も理に適った行動と言えるだろう。

「いや、そんなことはないよ。俺もそうするつもりだったからさ」
「だったらにゃんで黙るんにゃ？」

ミーシャは不機嫌そうに頬を膨らませる。いや、頬が膨らんでいるのは林檎を頬張っているからかもしれない。

「ミーシャの胸の膨らみが素敵だから見とれてただけだよ」
「にゃっはっは、ロンは褒め上手だにゃ！」

けらけらと笑い始める猫耳少女。こういう頭の螺子が緩いところは嫌いじゃない。アーシエスに似た台詞を言えば路傍に捨てられた塵を見るような蔑みの視線が返ってきたことだろう。

「そーいやハシユシユさんはまだ来ないのかにゃ？」
「旅の準備と魔弾の調達中。俺より各店に顔が利くからね」
「待たせたにゃん」

声に釣られて孤児院の入り口へ視線を移すと、黒と紫を基調としたアラバスタ共和国制式軍服を纏った師匠の姿がある。政府に所属する魔銃士として当然の格好なのだろう。しかし正装の軍服は上だけで、下は膝上まで伸びた戦闘用長靴を履いているだけだった。つ

まり横に編み上げの入った戦闘用長靴に覆われていない太股は完全に露出されている。これはもう普段の全裸に近い格好より逆に艶かしい。

「こつちがロンの魔弾にゃ」

そう言ってハシュシュは革袋から取り出した木箱を放り投げてくる。魅惑の絶対領域に意識を奪われていた俺は慌しく投擲物を受け取り中を確認した。魔導力によって質量を圧縮された第三式以下の魔弾倉が理路整然と詰められている。各属性ごとに百四十四発×三あるので偏った使い方をしない限り半年は充分に持つだろう。

「さすがに第四式以上の魔弾は確保できなかったにゃ」

「半年分の大口徑魔弾を用意できるなんて各国の軍隊くらいですよ」

「まあ、そうなんだけどにゃ」

鼻先を掻きながら師匠は申し訳なさそうな表情を浮かべる。正式な格好をしていると猫耳が生えていても知的に見えるから不思議だ。ちなみに俺は魔導工学技師が使う帯革に大量の物が収納できる作業着を戦闘用に改良したものを着用している。

「準備完了なら出発するにゃ」

そう促す師匠の視線が俺の右手の甲に向けられた。そこにはアーシエスとの契約によって生み出された闇の紋様が刻み込まれている。魔銃士を引退したハシュシュが急遽半年間の武者修行を提案してくれたのは、微塵の疑いようもなくこれに起因していて、潜在能力を到達者級まで引き出せるようになった俺を心配してくれているのだ。

曰く「無自覚に実力以上の性能を発揮していたら身体も精神も崩

壊するにゃ」である。つまり今回の旅で習得すべきは魔銃士としての立ち回り方と潜在能力の制御だ。

「いってらっしゃいにゃん」

歩き出した俺をミーシャは手を振りながら送り出してくれる。俺と師匠は右手を軽く掲げて旅立ちの挨拶に代えた。孤児院を出て二人きりになるとハシユシユは深い溜め息を吐く。

「常闇の魔女との因果は知らにゃいけど、あんな口車に乗るにゃんてロンは馬鹿にゃ」

「俺は力がほしかったわけじゃないですよ」

「じゃあ、なにが目的にゃ？」

鋭い眼光が返ってくる。本当に魔銃士としての師匠は凛々しい。だからこそ俺も本音を吐露してしまう。

「大人しく俺に守られるような奴じゃないですけど、あいつの背中をほかの誰かに守られるのは嫌なんですよ」

「命を賭ける価値があるによか？」

「もちろん」

こうして半年間に渡る武者修行の旅が幕を開けた。その後には練り広げられる冒険に比べれば、おそらく安全の保障された前哨戦なのだろうが、それでも俺にとって今後を担う重要な期間になったことは言うまでもない。

「こいつら無限増殖してるんじゃないですか！」

荒々しく聳え立つ山岳地帯の一角。空を舞う魔物にとって、これほど巢作りに適した場所はないだろう。背後に断崖絶壁を控えた横穴で、俺は二挺の魔弾銃を構えながら愚痴を零した。

「知らないにゃ！ ロンが近場で最高額の魔物を狩るとか言い出すから悪いんにゃろ！」

短機魔弾銃アルバレストを構えたハシユシュが正論を返してくる。半年間に渡る武者修行の総仕上げとして、貿易組合が高額賞金をかけている魔物退治を引き受けたのだが、予想を遥かに上回る飛蛇竜ワイアームの数に辟易としていた。

飛蛇竜。

竜の顔に蝙蝠のような翼を持ち、足がないのが特徴的な魔物である。翼を広げた状態でも三メートル、本体は一メートル五十センチ程度しかない。そのため脅威は本家の竜族に遠く及ばないが、徒党を組まれると思いのほか厄介な連中だった。

「来るにゃ！」 「来ますよ！」

俺と師匠の声が綺麗に重なる。次の瞬間——滞空していた飛蛇竜の一匹がハシユシュに襲いかかる。それを機に複数の飛蛇竜が俺に向かって攻撃を仕掛けてきた。

「こうなったら経費削減とか言ってる場合じゃにゃいにゃ！」

吼えるが早いか師匠は前方回転で飛蛇竜の攻撃を回避。円弧の終わりに第一式の魔弾が込められた弾倉を第三式用と取り替える。俺は二挺の魔弾銃で突っ込んでくる飛蛇竜を乱れ撃ちしていく。準備を終えたハシユシュが氷属性の第三式魔弾を短機魔弾銃で乱射。大量に排出された空葉莢が硬質な足場に落下して甲高い金属音を奏でる。そこへ銃声と飛蛇竜の断末魔が加わり狂想曲を演出した。

しかし弾幕を逃れた飛蛇竜の鋭い牙が師匠の左腕を引き千切る。ハシユシュは短機魔弾銃を落として声にならない悲鳴を上げた。反射的に俺は回転式弾倉シリンダーを回して氷属性から闇属性の魔弾へ変更。それから回転式魔弾銃を連続発砲することで、先行展開する闇術式に氷属性の魔弾が絡み魔術反応を引き起こす。液化した空気から不純物を取り除き酸素と窒素に強制分離。練成された氷点下百九十六度の液体窒素が飛蛇竜と師匠の左腕を凍結させる。

次いで俺は背中に担いだ強襲用狙撃魔弾銃アサルトライタを手に取り光属性第五式魔弾を装填。氷結させた師匠の左腕を飛蛇竜から切り離してハシユシュへ駆け寄る。即座に魔弾を射出して第五式回復系魔術を発動。傷口部分の血液が泡立ち始めたところで切断された左腕を合わせる。新たに形成された骨、血管、筋繊維、神経組織が自然と結合していく。

「ギャース！」

奥から現れた飛蛇竜が雄叫びを上げた。しかも数が把握できないほどの共鳴が起こる。

「本当に際限がないな」

そう吐き捨ててから俺は回転式魔弾銃の引き金を絞った。氷の刃に身体を貫かれた飛蛇竜は断末魔を上げて地面に落下。しかし一匹倒したところで連中の波状攻撃は止まらない。巣を荒らす侵入者の排除に躍起になっているからだ。

「ギャーッ！」

正面から突っ込んでくる飛蛇竜を撃ち落としながら、俺は身体を反転させて背後から襲ってきた一匹に蹴りを入れる。その反動を利用して地面に倒れ込んで第三の攻撃を回避した。三回の横転中に回転式魔弾銃の空薬莢を排出。一括装填。素早く起き上がり低空飛行で距離を詰めてきた飛蛇竜の牙を跳躍で避ける。

「どうやら少し知恵が回るらしい」

俺は誰にでもなく独りごちた。重力に従い落下するところへ三方向から狙いを定めてきた飛蛇竜が襲いかかってくる。一匹に的を絞った俺は対峙する標的へ発砲。残った二匹に右足と左横腹を食い千切られる。本来なら致命傷だが、もちろんそうはならない。負傷した俺の身体は黒煙を発しながら霧散していく。あとに残されたのは閻属性魔弾の空薬莢。俺は悠然と飛翔する飛蛇竜を後頭部から撃ち抜いた。

「経費削減は諦めると言っただろう？」

そこでようやく怒濤の波状攻撃が収まる。閻雲に突っ込むだけでは勝てないと防衛本能が悟ったのかもしれない。しかし警戒しながらも見逃すつもりはないようだった。俺を遠巻きに取り囲んで退路を塞いでいる。

「師匠、まだ動けませんか？」

「いや、もう完治してるにゃ」

「それじゃあ、契約書の処理をお願いします」

「ロンはなにをするつもりにゃ？」

「もちろん飛蛇竜の殲滅ですよ」

言い残して俺は横穴の最深部を目指して駆けた。風属性の魔弾を逆方向へ射出して加速。途中で襲撃してきた飛蛇竜はすべて無視を決め込む。行き止まりまで到達した俺は風属性魔弾を斜め前方へ撃ち込んで急制動。最深部に控えた飛蛇竜の群れと追跡してきた連中を合わせて三十数匹が残っている。俺は迷うことなく第六式魔榴弾を選択して投擲。

直後に瞳を閉じて光属性の魔弾を真上へ発砲。閃光系術式が展開して薄暗い横穴に太陽光が誕生する。俺は薄目を開けて強襲用狙撃銃に跨るような格好で跳躍。身体を中空に浮かせた状態で引き金を絞り風属性の第五式魔術を発動させる。

まるで撃ち出された弾丸のような飛行体験。数瞬で視界が開ける。俺は横穴の入り口付近で交戦しているハッシュの身体を抱き上げ一緒に中空へ舞う。

刹那——後方で落雷のような轟音が鳴り響いた。横穴崩壊の衝撃が大気を震わせる。俺と師匠は緩やかな放物線を描きながら下降。岩場に落ちると一巻の終わりなので高度と方角を風属性魔弾で調整しておく。一段落着いたところで俺は師匠に話しかけた。

「契約書は大丈夫ですか？」

「問題にゃい」

言いながらハッシュュは魔術組成式の施された契約書を手渡してくる。予断の許さない空中移動にも関わらず師匠は気だるそうに伸びをしていた。緊張感の無さに辟易するが、まあ、下手に取り乱されるより百倍いい。

俺は契約書に浮かび上がる刻印を確認して胸を撫で下ろした。これは羊皮紙に依頼内容が記述されたもので、討伐対象の血液を滴らせることで魔術が発動。対象固体の絶命または集団の崩壊を認識すると刻印が浮かぶ仕組みになっている。

「やりましたね」

「まあ、にゃんとかにゃ。しかしもう私の出番はにゃいにゃあ」

少し残念そうな表情でハッシュュはこちらを見やる。気恥ずかしさもあって俺は荘厳な自然が広がる眼下へ視線を移した。過酷な環境だからこそその幻想的な美しさがある。その光景とは異なる俗物的な話題が師匠の口から紡がれた。

「本当に賞金を独占していいによか？」

「もちろん。旅の軍資金だけもらうとして、あとは師匠が好きに使ってください」

「こういう場合、拒否するのは失礼にゃんだろうにゃあ」

にゃうにゃう言いながらハッシュュは髪を掻き乱した。この半年間を通じても残念可愛いところはまるで変わっていない。どうやら決心が着いたらしく話を再開する。

「旅立ちの必需品は私が揃えてやるにゃ。それで余った額は好きに使わせてもらうにゃよ」

「最後まで恩に着ます」

落下地点に最適そうな川を視界に捉えたので、俺は師匠に視線で合図を送り着水の了承を得た。明日の誕生日を迎えれば本格的な一人旅が始まる。アーシエスへの想いを馳せながら俺は眼前に迫る水面に飛び込んだ。

クオン大陸の中央に位置する魔導都市フォルガント。

神聖イージス王国、アラバスタ共和国、アルマダ連邦の三国が公的に認めている独立都市だ。各国の中継点として人が集まるため、各地の特産品や文化が入り乱れている。本国には他種族を嫌悪する風潮が少なからず残っているが、祖国からこの魔導都市へ移り住んできた連中に差別はない。むしろ他種族と積極的に交流して異なる文化を楽しもうとしている。もちろん遊び方面だけではなく、各国の技術力や経済情報も然りだ。

今にも陽が落ちそうな夕刻。

大通りに面した三国公認の換金所には、取引時間の終了間際ということもあって、多くの賞金稼ぎが最新情報を映し出す大画面魔導映像に注目していた。この時間帯の常識とも呼べる光景なのだが、こと換金所の休日前に限ると、飢えた狼たちが羊の群れを血眼になっ

「相変わらずですね」

「まあ、ここは私が現役の頃から変わってにやいからにや」

ハシユシユは露店で購入したばかりの林檎を齧る。しかし賞金稼ぎの需要に対して賞金首の供給が少ないわけではない。むしろ賞金をかけられるような強い魔物や悪党がのさばっている世界だ。

「おうおう、魔導映像前は弱者の掃き溜めだな。手頃な賞金首が現れないかと必死の形相で探していやがる。そんなことに時間を費や

すくらないなら、己の力を磨いて大物を倒せる技量を身につけたほうが賢明だろ」

わざと聞こえるような大声で人族の青年が皮肉る。その言い分はもつともであるが、努力すれば誰もが優秀な賞金稼ぎになれるわけではない。その点で語を引き継いだエルフ族の青年は冷静だった。

「分相応を弁えているだけ利口じゃないか？ 実力の伴わない自信家ほど早死にする世界だからな」

格好から推測すると大剣を背負った人族が魔術剣士、それらしい得物を持っていないエルフ族が魔術士といったところだろう。

「さっさと換金を済ませにゃいと飛空艇の出港時間に間に合わぬにゃくにやるにゃよ」

促されて俺は二人の青年から視線を外した。それから師匠の背中を追いかけて奥へ進む。大量の現金を保管しているわけではないのだが、重要な情報を管理しているためか、奥へ向かうほど警備が厳重になっている。

「やあオルガン、久しぶりだにゃあ」

巨体に厳めしい顔を乗せた熊系獣人族の中年男がハッシュユの姿を見るなり嬉しそうに微笑む。豪快な笑いが似合いそうなのに、どういいうわけか控えにしか笑わない。

「おお、ハッシュユじゃないか！」

オルガン・ベルベット。元格闘士で現在は換金所の所長を勤めて

いる熊系獣人族の中年男だ。俺とも初対面ではなく、一ヶ月半前にここで顔合わせしている。

「なにか収穫でもあったのか？」

「ヨランオラン山脈に根城を張っていた飛蛇竜^{ワイブーム}にやよ」

「ヨランオラン山脈の飛蛇竜と言えば、半年くらい前、イージス王国の騎士団一個小隊が討伐に出向いた奴らか？」

伝えられた情報に俺は驚きを隠せない。それはつまり――騎士団の全滅を意味しているからだ。己の生命より誇りを大切にするエルフ族の騎士に敗退の二文字は存在しない。

「手強い連中だったにゃ」

オルガンの質問にハシシュシュは肯定の動作。それを聞いた所長が苦笑する。

「……冗談で紹介したんだけどな」

師匠と所長は雑談を交わしながら移動を始める。向かう先は高額賞金首専用の窓口だった。地下一階に降りると魔導映像前からは想像もできない静寂に包まれる。薄暗くコンクリート壁が剥き出しにされた内装は、さながら廃屋か地下駐車場のようで、美観もなにもあったものではなかった。先客がいる様子もないので、俺と師匠はそのまま受付へ向かう。

「気が早いな。ちょっとは俺の話相手になってくれよ」

「長居させたいのにやら、大理石で地面を舗装したらどうにゃ？」

「無茶を言うな。滅多に人が来ない場所に金をかけるなんて愚の骨頂だぜ」

他愛ない世間話をしているうちに専用窓口へ到着。

「いらっしやいませ、本日のご用件はなんでしょうか？」

換金所指定の制服に身を包んだ女性――いや、女の子と称して差し支えないような年齢の少女が俺たちを出迎えた。オルガンの姿を確認すると、少女は「あ」と口を開き慌てて一礼する。

「知っている顔を見つけたただけだ。普段通りに対応してくれて構わない」

「あ、はい。わかりました」

「それじゃあ早速」

所長の相手をハシユシュに任せて、俺は刻印の浮かんだ契約書を窓口に提出した。少女は受け取った契約書を専用の魔導具で読み込む。やがて必要な情報が端末画面に表示されたのだろう。

「ハシユシュ・ミラケツタ様とロン・ラズエル様ですね。ただいま共同名義の口座に――」

送金を完了致しました。

そう繋がるはずの言葉が途中で止まる。おそらく『【生息地・ヨランオラン山脈】【種族・飛蛇竜】【一団の名称・バジル】【賞金額・三億ダラス】【処理済案件】』と表示された画面に驚愕したのだろう。なぜなら三億ダラスは普通の勤め人が生涯に稼ぐ金額を凌駕しているからだ。

「ただいま共同名義の口座に送金を完了致しました。またのご利用をお待ちしています」

慌てながらも少女は飛び切りの営業用愛想笑いを顔に貼り付けて一礼する。俺が手続き完了を告げると、ハシユシユはオルガンの話を制して歩き始めた。所長は寂しげな表情を浮かべて師匠との別れを惜しむ。俺は「時間があるときに三人で飲みましょう」みたいな社交辞令を返しておく。こういう年齢に相応しくない行動も『人生』の記憶が残っている悪影響だろう。

あと本当にどうでもいい話だが、ハシユシユは野生的な異性に死ぬほど人気が高い。

夜の空に浮かぶ豪華な飛空艇。

魔導船内は複数の層で構成されていて、後部は主に各種店舗や居住区、前部は音楽隊が美しい音色を奏で酒が振舞われる社交場だった。その一角にある卓へ着いて、俺と師匠は酒杯を重ねる。アラバスタの首都まで約十二時間に及ぶ長旅だ。

「誕生日にアラバスタへ凱旋帰国、翌日また旅に出るにゃんて正気の沙汰じゃにゃいにゃ」

麦酒を飲みながらハシユシユは焼き林檎を齧る。俺は苦笑いを浮かべながら仔牛肉の包み焼きに箸を伸ばした。卓の上には南海秋刀魚の塩焼き、野兎の網焼き、人参と芋と糸蒟蒻の煮物、アルマダ風茸鍋、野菜の盛り合わせなど多品種が並んでいる。それらを食べる道具も「箸・匙・肉叉」と揃っていた。平和な世界とは呼び難いのだが、グランシエルの食文化は随分と栄えている。

「ただ祭典に間に合えばいいというわけではありませんからね」

「まあ、そりゃそうにやんだろうけどさ」

穏やかな音色と美味しい食事が時間の流れを緩やかにする。
食事を進めながら半年間の成功談や失敗談に花を咲かせた。

赤茶色の髪に猫耳を生やした女客室乗務員が追加の麦酒と葡萄酒を運んでくる。妖艶な色香を漂わせた妙齡の美女なのだが、俺の場合、その美貌を素直に楽しむことができない。これも『人生』の影響なのか猫耳と尻尾に変な先入観があって、ちゃんとされればされるだけ可笑しくなってしまうのである。

「ごゆっくり」

女客室乗務員は一礼して隣の卓へ移動した。その直後に可愛らしい子供の声上がる。

「注文してないのに牛乳^{ミルク}を出すなーっ！」

声に釣られて振り向くと牛乳を差し出された女の子が女客室乗務員に反抗的な態度を見せていた。幼児体型というより幼稚園児にしか見えない容姿をしている。しかし本当の子供ではなく、アルマダ連邦に多い妖精族だ。

「あら失礼。ご注文は？」

「……牛乳で」

「頼むのかよ！」

思わず突っ込んでしまった俺を一体誰が責められよう。

「私のことも構ってくださいよお」

金髪を二つ括りにした妖精族の幼女は俺の服を引っ張りながら要求を口にする。俺の突っ込みの速さに感動したらしく、よくわからないままに随分と懷かれてしまった。食後に甲板で夜景を楽しむ予定は滞りなく実行されているわけだが、思わぬ連れができてしまったことは素直に喜べる状況ではない。

フィリア・ハートレット。見た目の可愛らしさとは裏腹にアルマダ連邦の高官である。今回の訪問もアラバスタ共和国からの正式な要請で、魔導工学の実験に必要な膨大な魔力供給のためらしい。

「これをやるから少し大人しくしてくれ」

俺は溶けると味が変わる飴玉を革袋から取り出した。こういう細工菓子にもアラバスタの技術力が示されていて、他国へ持ち込むと本国で売られている三倍の価格を付けても飛ぶように捌ける。もともと商売にするとなれば話は別で、大量の物資を遠方へ運ぶとなれば、それにかかる手間や費用を計算しなくてはならない。高く売れても利益が生まれなければ成り立たない仕組みだ。

「味が林檎から蜜柑に変わりました!」

フィリアは嬉々とした表情を浮かべる。子供や女性が甘い食べ物に目がないのは万国共通らしい。ちなみに手順前後で申し訳ないのだが、傍らで飴玉を舐めている幼女は俺が突っ込みを入れた人物ではない。意味がわからないかもしれないが、これは単純な話、幼女

には二卵性双生児の姉がいるのだ。

俺に突っ込まれたのが姉——フィリス・ハートレット。

俺に懷いてしまったのが妹——フィリア・ハートレット。

つまり双子の姉妹。そして俺は姉フィリスの怒りが鎮静するまで甲板へ追放されたわけだ。ハシユシュが「私に任せるにゃよ。酔わせて眠らせればこっちのもんじゃ」と駄目男が言いそうな台詞で送り出してくれただけに不安が残る。

「溶けてしまいました。ロンさん、もう一つ私にください」

フィリアは懇願しながら革袋に手を伸ばしてくる。許可が下りなければ強奪するつもりなのだろう。抜け目ないというか実に子供らしい行為だ。俺は右手で幼女の額を押さえて距離を保つ。それから左手で飴玉を取り出して交渉の場を設けた。

「フィリスのご機嫌を直すにはどうしたらいい？」

「放っておけば勝手に直りますよ。それよりもっと私を甘やかしてください」

言いながらフィリアは短い腕を精一杯伸ばして革袋を奪還しようとしてくる。姉が子供扱いされることを嫌うのに対して、妹は積極的に子供扱いされたいらしい。なんか面倒臭い姉妹だな。

「それじゃあ、この一件が原因で魔力供給を取り止めるなんて事態は起こらないんだな？」

「国が決定した提携を私情で破棄するなんて不可能に決まってるじゃありませんか？ そんな駄々をこねるのは子供くらいです」

だから不安なんだよという言葉をなんとか飲み込む。

嘆息を漏らしながら俺は諦めを知らない少女の額から右手を離れた。勢い余ったフィリアが俺の腹部に挟れるような体当たりを食らわせる。こちらにも責任があるので不問にしておこう。

「ともかく飴玉をやるから先に船内へ戻っておいてくれ」

「そうやって簡単に丸め込めると思ったら――」

口の中に飴玉を放り込んでやると、少女は「あ、葡萄味だ」と可愛らしく微笑む。機を逃さず俺はフィリアの小さな掌に飴玉を六つ並べる。

「フィリスと半分ずつだからな」

「はい」

小気味のいい返事をした少女は、とてとて歩きながら船内へ戻っていく。うーん、アルマダ連邦は大丈夫なのだろうか？ そんな思考を一瞬だけ巡らせてから、俺は甲板の端まで移動して壮大な光景が広がる眼下を眺めた。しかし飛空艇の放つ光量だけでは景色を楽しむまでに至らない。所々に建てられている監視塔の灯りが見えるくらいだった。

でもまあ、静寂を楽しむには丁度いいのかもしれない。

俺は瞳を閉じて壁に背中を預けた。どれくらい経ったのだろう。

「まだこんなにやとところにいたによか？ フィリスにやら随分前から夢の中にやよ」

聞き慣れた声が耳に届く。俺は虚ろな意識を呼び戻して声の主へ

視線を向けた。

「居眠りしてたによか？」

小脇に酒樽を抱えたハシユシュが小首を傾げる。追加注文が鬱陶しくて樽で渡されたのだろうか？　しかしそれよりも気になる存在が師匠の傍らに立つ美女だった。おそらく二度と目にすることはないだろうと諦めていた衣装を身に纏っている。赤黒い髪を後ろで束ねた妙齡の人族は深紅の生地に桜と市松が描かれた着物姿だった。

「師匠の知り合いですか？」

「知り合ったばかりにやけど知り合いには変わりにやいかもしれにやいにやあ」

「我の名はティア・ノート・ソートによろん」

おそらく語尾はハシユシュの真似をしようとして失敗したのだろう。一人称が「我」で語尾が「によろん」とか許されるわけがない。二人とも適度に酔っているらしく、女同士で腕を絡ませて喜んでいる。厳密には異なる民族衣装なのだろうが、着物と酷似した懐かしい衣装に郷愁を感じてしまう。

「ロン・ラズエルです。その衣装はどこで入手されたんですか？」

「にやんだ？　ロンは衣服に興味があるによか？」

「歴史に詳しいによろん？　飲み比べの勝者を見届けてくれるなら私の知る滅んだ文明について聞かせてやろう」

着物姿の美女は師匠の頬に口付けするかのように顔を寄せた。これはこれで画的に悪くないのだが、今はティアの話を優先すべきだろう。俺は恭しく首肯して飲み比べに立ち会うことに同意した。

曰く三国が対立する現在の構図が出来上がる遙か昔。世界は点在する小国が覇権を争う戦乱の時代だった。その中に着物と酷似した民族衣装を身に纏う文明があったという。どうやら俺の知り得た情報がすべてではないらしい。あのときグランシエルに関する資料を読み込んでいれば記載されていたのかもしれないが、消えると言われた記憶に細かな情報まで詰め込む意味を見出せなかったのは当然だろう。

飲み比べは二つ目の酒樽に突入していた。二人とも酒が回り呂律が怪しくなっているが、言動を見る限り倒れるにはまだ時間がかかりそうである。面白い話も聞けたので最後まで付き合うことに異論はない。

しかしそんな状況を一変する出来事が発生した。

鈍い音がして飛空艇が大きく揺れる。甲板に出ていた乗客は姿勢を崩して転倒。各所から悲鳴と動揺のざわめきが巻き上がった。すぐさま数名の客室乗務員が現れて乗客を船内へ誘導。それと平行して重々しい鎧を身に付けた熊系獣人族の男が八人構成の部隊を指揮する。

有事の際に備えて常駐している護衛団だ。飛空艇本体に魔導力を活かした砲台を設置する案もあったが、しかしそれを実装することで他国に戦争の準備を進めていると疑われては協力を得られない。つまり飛空艇は乗り物であって、兵器であってはならないわけだ。そんな経緯の末に生まれた案が護衛団の常駐である。

「偵察班は目標の捕捉を急げ！ 魔術班はまず飛空艇の防御結界だ！」

怒号に合わせて飛蛇竜ワイブームと大きさの変わらない飛竜ワイバーンに跨った二名が

闇夜へ舞う。エルフ族の魔術師二名は詠唱を開始して空中に黄緑色の魔術組成式を描き出した。ほどなくして風属性の防御結界「――風々障壁――」が発動。大気で形成された防御壁が飛空挺を優しく包み込む。

そんなとき近くで酒杯を重ねる音が響いた。

「こんにゃとところで好敵手に出会えるにやんて私は幸運だにゃ」

「我と酒を酌み交わすことは大変な名誉によろん」

「私と飲み比べするのも名誉なことによん」

「ならば我をもっと楽しませるによろん」

この状況で酒を飲んでいられる二人の神経が少しだけ羨ましかった。

「お客様も早く船内へ避難してください！」

若い人族の客室乗務員が血相を変えて叫ぶ。俺は泥酔の二人を船内へ運ぶ労力と甲板で守る労力を天秤にかけて居残りを選択した。

「問題ない。ここで護衛団の戦闘を見学するのも一興だ」

「しかし我々にはお客様の安全を――」

俺は右手の甲を掲げて客室乗務員の言葉を制する。この半年間で知名度もかなり上昇して、今では「常闇の魔銃士カルナバル」という呼び名まであった。もちろん常闇の魔女に魂を売り渡した糞野郎という意味が込められた蔑称である。しかし強さの証明には便利な代物で、今回も説得の時間短縮に一役買ってくれたわけだ。

「団長、揺れの正体は巨大鳥ロックが船底を掠めたからのようです」

「ふむ。大きさは？」

「翼幅で二十メートル程度ですね」

船上へ舞い戻った偵察班の青年は飛竜ワイバーンに騎乗したまま報告を済ませる。鎧姿の熊系獣人は一考してから指示を飛ばした。

「その規模の巨大鳥が飛空艇に襲いかかってくるとは考え難いな。なにかに追われていた可能性がある。改めて周辺の警戒に当たってくれ」

「はっ！」

偵察班の青年は器用に手綱を揺らして飛竜を再飛翔させた。飛蛇ワイアム

竜と異なり飛竜は正しく接すれば心を通わせることができるが、主従関係あるいは友好関係を築くまで信頼を得るとなれば容易くない。最近では魔導船や飛空艇の護衛団に必ず含まれている偵察の専門家だ。

俺は甲板を見回して位置関係を確める。

護衛団は飛空艇の全方向を監視できるよう船首の熊系獣人を起点に菱形を描くように展開。その中心にエルフ族の魔術士二名を配置している。静寂を取り戻した甲板へ船体の左右に設置された巨大な回転翼機が騒音を撒き散らしていく。しばらくすると偵察班の二名が無事に帰還した。

「巨大鳥の軌道修正完了」

「周辺にそれらしい魔物は存在しませんでした」

「解せんな」

団長は低い重低音を発しながら腕を組む。

「巨大鳥の前方不注意が原因だと言うのか？」

「なんとも言えませんが……それらしい魔物がいないことも事実です」

「我々は安全が確保されるまで待機。偵察班は見てきたことを船長に報告してくれ」

「わかりました」

偵察班の二名が飛竜を従えて船内へ戻っていく。直後に鎧姿の熊系獣人がこちらを一瞥した。ちなみに俺たち三人は船首と右翼側の中間くらいに陣取っていたので、その時点では前方へ向き直る行為と区別が付かなかったのだが、直後に描き出された黄土色の魔術組成式と向けられた興味が判断材料となる。

「常闇の魔銃士、俺と一戦交えるのも余興ではないか？」

屈強な肉体を誇示するかのように熊系獣人の団長は魔方阵の中から巨大な両手斧を引き出した。左右に半円ずつ刃の付いた土属性魔術で形成された重厚そうな得物である。横目で護衛団の様子を窺うとエルフ族の魔術師二人がやれやれという風に肩をすくめていた。どうやら強者に対して一騎討ちを挑むのはいつものことらしい。

俺は回転式魔弾銃と自動式魔弾銃を素早く引き抜きそのまま両手を掲げた。

「降参します。魔銃士は戦う度に金を失う呪われた職業ですからね」
「ぬははははははははははっ！」

敗北宣言を聞いた鎧姿の熊系獣人は快活に笑う。

「見ると聞くで大違いとはこの事だな。どうやら力に溺れた馬鹿者ではないらしい」

「飛空挺護衛団長に褒められるにゃんてロンも随分と出世したものだにゃあ」

ハシユシユは酒杯を酌み交わしながら賞賛の言葉を述べた。着物姿の美女まで「おめでとうによりん」と持ち上げてくる。どうしてもいいが語尾変わってないか？ 本当に場の緊張感を台無しにしてくれる二人だった。

「俺は第三飛空挺護衛団を任されているベイリック・サルファードだ。常闇の魔銃士の名も聞かせてくれないか？」

言いながらベイリックは巨大な両手斧の柄を船上に突き立てる。熊系獣人族が戦闘を好むという噂は聞かないが、どうやら眼前の人物はそういう性格らしい。引き抜いた魔弾銃を帯革に戻して名乗ろうとしたのも束の間、左翼側の監視に当たっていた護衛が慌しく叫んだ。

「巨大な影が浮上してきます！」

その声に反応した護衛団が左翼側へ集結する。すでに紹介済みの団長とエルフ族の魔術師二名に加えて、軽装な鎧姿の人族が二名と露出度の高い革鎧姿の猫系獣人族が一名だ。それぞれがどういう役割を担っているかは判然としないが、構成を見る限り魔術士は後方支援、あくまで前衛主体の攻撃陣で敵を倒すという戦術を選択しそうな印象を受ける。本来なら遠距離攻撃に勝る魔術士が攻撃を引き受けて、前衛は詠唱が完了するまでの時間稼ぎを担当することが多い。

「なん……だと？」

眼下を覗き込んでいた団長が渴いた声を絞り出した。ほかの連中も状況に気圧されて二の句が継げないらしい。俺は師匠と着物姿の美女を守る位置へ立ち塞がった。

「偵察班の奴、警戒範囲を見誤りやがったな」

「叱責はこの状況を乗り越えてからでも遅くはないさ」

「団長の言う通りにゃ」

刹那——甲板の雰囲気が一変する。

夜の海から浮上したのは巨大な黒竜だった。頭部から尻尾までの

全長が推定二十五メートル、体重は推定二十トン前後で黒色の鱗に全身が覆われている。鰐のような頭部には二本の角を生やし、前肢と後肢のほかに背中から蝙蝠のような翼を生やしていた。巨大な牙や鋭利な爪といった露骨な凶器も怖いが、この大きさになると長い尻尾による強烈な一振りも無視できない。

「こちらから攻撃は仕掛けるなよ。悠然と通り過ぎてくれるならそれに越したことはない」

ベイリックは気持ちの逸る団員に自重を促した。黒竜は周囲を警戒することもなく飛翔している。史上最強の種族は本能的な怖れを知らないのだろう。

「にやにやにと、さっさと死んだ演技ふりをするにやん」

言い終えるとハシュシュは船上に突っ伏した。その危険回避方法がすべての種族に有効だと考えている師匠。うーん、いつか残念可愛いが流行るといいな。というか酔っ払っているくせに対応の早さは一級品だった。

「巨大鳥が急浮上したのはこいつが原因だろうな」

忌々しそうに熊系獣人族の団長は吐き捨てた。防御結界を維持する魔術士二名。前衛陣もいつでも攻撃を仕掛けられるよう臨戦態勢を貫いている。飛空艇と並行飛翔していた黒竜は鰐のような頭部を捻り視線を船上へ向けた。縦長の虹彩が甲板の護衛団を煙たそうに睥睨する。

「どうやら見逃してくれるつもりはないらしいな」

次の瞬間、黒竜の大顎が開かれて灼熱の吐息が紡ぎ出された。超高熱の吐息は大気中の酸素を燃焼させて火炎となる。闇夜を明るく照らした紅蓮の炎は飛空挺に直撃する寸前で風の障壁と衝突。その衝撃だけで船体は再び大きく揺れた。

「あと何回くらい持ちそうだ？」

「どれだけ頑張っても一回が限界ですよ！」

エルフ族の魔術士は悲鳴に近い声を発した。防ぎ切れない熱波が防御結界を侵食し船体の一部を溶かして泡立てている。どう転ぶにせよ短期決着が求められる局面だった。

「戦闘開始だ！」

熊系獣人族の咆哮が夜の海に響き渡る。

怒号を合図に前衛四名で矢印のような陣形を構築。熊系獣人族の団長が矢尻の先端、その両翼に二名の人族が控える。猫系獣人は少し離れた後方の位置へ移動すると弓を引くような構えを取った。

「一撃で仕留めるぞ！」

ベイリックは具現化させた両手斧を消失させて新たな魔術組成式を展開。両翼の二名が加わることで魔法陣の大きさが直径十五メートル前後まで拡大した。ここでもうやく俺は護衛団の構成と戦術を理解する。これは前衛四人一組で超弩級の遠隔攻撃を可能とする砲台だ。

「撃ててててててててててえい！」

団長の指示で猫系獣人の射手は限界まで引いていた不可視の弦を解き放つ。次の瞬間、巨大な土属性の魔法陣から形成された硬質の矢弾が発射。距離が近い上に吐息を出して隙の生じている黒竜の胴体へ見事に突き刺さる。

「グオオオオオオオオオオオーッ！」

傷口から鮮血が飛び散り白い肉を露出させた。また着弾の衝撃で飛空艇から距離を遠ざけられている。これなら体勢を崩して暴れられても船体に届くことはないだろう。もしそこまで計算して攻撃方法を選択したのなら、やはり護衛団の実力は計り知れない領域にある。

「グオオオオオオオオオオーッ！」

恨めしい雄叫びを上げながら黒竜は夜の海に沈んでいく。やがて視界から完全に消える。それを見届けて団長は快活な笑った。

「ぬはははははっ！ 不意を突けばいけるものだな」

「あっさり」と『――風々障壁――』^{バリアール}が破られそうににやっったときは焦ったにや」

「あのときは船内に駆け込んで『お客様の中に高位防衛結界を張れる方はいませんか？』って叫びたい気持ちだったわ」

猫系獣人の感想にエルフ族の魔術士は軽口で応じた。すでに戦闘時のような緊張感はなく、護衛団の面々も普段通りの関係に戻っているのだろう。俺は甲板に突っ伏したままの師匠に声をかける。

「師匠、もう大丈夫みたいですよ？」

「にやにやにや」

ハシユシユは顔を上げて周囲を確認した。それから身体を起こして座る。なにか腑に落ちない表情をしているので質問を投げかけておく。

「どうかしたんですか？」

「珍しく勘が外れたにやあと思ってにや」

確かに師匠が死んだ演技^{ふり}を選択するときには、そう簡単に勝てない敵の場合に限られていた。それに比べると今回の黒竜は楽勝過ぎた感があるかもしれない。

「悪いほうへ外れるよりいいじゃないですか？」

「まあ、確かにそうだにゃ」

ハシュシュは酒樽に空いた杯を潜らせて口へ運ぶ。本当に底が知れない。しかしそれは師匠だけでなく、同席している着物姿の美女にも言えることだった。こちらは黒竜との戦闘中も一人で飲み続けている。

「ロン、新しい酒樽を調達してくるにゃ」

言いながらハシュシュは空になった酒樽を差し出してくる。俺は不承不承に引き受けて船内へ潜った。もう少し暗澹とした空気が流れていると思ったが、この程度はよく起こることらしく、墜落するかもしれないと不安に駆られている者はいなかった。俺は適当な客室乗務員を捕まえて酒を補充してもらう。

甲板へ戻ると団長に叱責される偵察班の姿があった。しかし怒鳴り散らされているというより、警戒範囲やその選定方法について説明されている印象。そんな光景を横目に俺は酒を待ち詫びている二人のところへ戻った。

再開した飲み比べの中で飛空艇ならではの話題が生まれる。

「そーいやティアはどうしてアラバスタに向かうんにゃ？」

「旧友に会うためによりん」

酒杯を傾けながら妙齡の美女は即答した。単純に人族ということ踏まえれば、同郷で友人と再会することもあるだろう。このときの俺はそれくらいにしか考えていなかった。

「それなら俺たちと似たような目的ですね」

「奇遇によりん。これもなにかの縁かもしれないよろろん」

もう語尾も人格もよくわからなくなっていた。同意を求められた俺は曖昧に相槌を打っておく。心強いという意味で旅は道連れと使われるが、果たしてこういう場合にも適応されるのだろうか？

ふと西方向の空が明るく輝いた。

間もなく苛烈な熱波が甲板を焼き払いながら通過していく。左翼から船首へ抜けた一閃が吐息の痕跡を残した。

「馬鹿な！」

鎧姿の熊系獣人は後方を振り向いて叫ぶ。そこには胴体から大量の血を垂れ流した黒竜の姿があった。魔術で形成された矢が消失した所為で、傷口からの出血が明らかに増えている。

「グオオオオオオオオオオオーッ！」

雄叫びを上げながら黒竜は高度を上昇させていく。その行動に歴戦錬磨の団長は表情を強張らせた。

「上空から突っ込んでくるつもりか！」

「そんなことをしたら向こうもただでは済みませんよ！？」

「怒りで我を失っているのかもしれない。ともかく衝撃に備えて上空へ防御結界を集中させろ！」

ベイリックは気持ちを切り替えて指示を飛ばした。上空から攻撃を仕掛けられては撃ち落とすわけにもいかない。受け流すような対策を選択するしかないのだった。すでに死んだ演技をしている師匠の予感、どうやら最低最悪の方向で当たっていたらしい。

「やれやれ」

呟いて俺は状況打破に思考を巡らせる。師匠を連れて飛空艇から脱出するだけなら簡単だが、それは最終的な手段であって今選ぶべき行動ではない。しかし黒竜の急降下^{タッチダウン}を防げるような魔弾を持ち合わせていないのも確かだ。

「我的好敵手を無下に失うのは惜しい」

ゆらりと立ち上がった着物姿の美女は懷からココリの実とククリの実を取り出して口へ含む。酒飲みの常備薬みたいなもので、低位の回復魔術と似た効果が得られる。アセトアルデヒド脱水素酵素がアセトアルデヒドを酢酸へ分解、さらに水と二酸化炭素へ分解して体外へ排出することで素面へ導く。

「によりーん」

不意に着物姿の美女は手摺りへ飛び乗った。俺は謎の行動を目で追うことしかできない。

「あ！」

呼び止める間もなく着物姿の美女は夜の海へ飛び降りた。護衛団は上空からの攻撃へ備えることに精一杯でこちらを見ていない。真上に展開された土属性の魔法陣から巨大な盾が具現化され始めている。乗客が落ちたと言ってもどうにかなる雰囲気ではない。

刹那——右翼下方から真紅の鱗に覆われた巨大な竜が空へ昇っていく。この異変には護衛団の連中も振り返る。そして想像を絶する

状況に言葉を失うのだった。

「ティアマトだ！」

そんな中でベイリックが真紅竜の正体を叫ぶ。それは火属性を極めた魔王——真紅竜王ティアマトの名だった。戦闘時にしか真の姿を見せないと聞いていたが、なるほど普段は人族に化けているらしい。

真紅竜王は顎を開くと中空に深紅の魔術組成式を描き出した。なにを隠そう魔術はこちら側の専売特許ではない。知能の高い魔物や竜には上手く使いこなせる連中がいる。火属性の超高位魔術「——爆灼閃光フレア——」を無詠唱で発動。

深紅の魔方陣から赤い閃光が上空へ向けて放たれる。次の瞬間、上方で灼熱の球体が発生。爆裂と六千度に達する超高温が黒竜を蒸発させた。それから真紅竜王は身体を人族に戻して甲板へ舞い降りる。護衛団は魔術組成式を解除することも忘れて呆然としていた。

「これは——引き分けでいいよりん？」

美女の見つめる先には寝息を立てているハシユシユの姿があった。反則技の使用と睡眠時刻が判明しない以上、この飲み比べの勝敗は次回へ持ち越すべきだろう。

「ですね」

俺が鷹揚に首肯すると着物姿の美女は柔和に微笑む。

アラバスタ共和国、首都シルビアの港。

「常闇の魔銃士、不本意な結果とはいえ感謝している」
カルナバル

飛空艇から降りる際、俺は団長に声をかけられた。この時点で名乗り損ねていたことを理解し、酒樽を両脇に抱えながら前方を歩く師匠と着物姿の美女を見やる。

「礼なら真紅竜王に言うべきでしょう？」
ティアマト

「おいおい、そろそろ誰か感謝を受け取ってくれないか？ このままだと堂々巡りになってしまうからな」

なるほど、すでに真紅竜王や師匠には感謝を伝えたいらしい。

「そういうことなら俺で終わりにしましょう。どうもどうも。しかしあのとき——護衛団が黒竜から飛空艇を守る可能性ってどれくらいあったんですか？」

俺の問いに鎧姿の熊系獣人は苦渋の表情を浮かべた。

「まったく被害を出さない確率は半々より少し下くらいだな。とてもじゃないが乗客に飲んでもらえる数字じゃないさ」

どうやら予想以上に最悪の状況だったらしい。
ふと団長の視線が着物姿の美女へ向けられる。

「一年後に魔王が一堂に会する祭典が催されることを知っているか

？」

「ええ、まあ」

「どんな願い事でも叶えられるという魔石が一つの場所に集まるわけだ。なにも起こらなければいいんだがな」

言われて俺は怖ろしい事実を把握した。誰が主催するのか知らないが、そこに思惑がないとは限らない。むしろ魔石を持つ八英傑が集結してなにも起こらないほうが奇跡だろう。そう考えれば火属性を極めた魔王も祭典を迎える下準備をしているのかもしれない。

本当に――やれやれだ。

「誕生日、おめでとくにゃー」

孤児院の中にある比較的広めな一室。乾杯の音頭を取るミーシャの大きな胸が上下に弾む。健康的な褐色肌に半年間でまた育った感のある巨乳は妙な色気があった。祝杯を掲げるハッシュやティアも美女だし、久々に顔を見た孤児院の先輩や後輩も美少女が多い。そしてどういわけか俺の膝の上に座っている幼女も可愛らしい顔立ちをしている。この状況を最も適切な言葉で表現しなさいと問われれば、おそらくハーレムという単語になると思うのだが、どうして俺の心はちっとも晴れやかじゃないのだろうか？

「次は苺が食べたいです」

言われた通り俺は手を伸ばして皿の上に盛られた苺を取る。それをアルマダ連邦の高官――フィリアの口へ運ぶと幼女は餌を与えられた雛のように頬張った。美女二人は戦利品である酒を飲んだくれ

ているだけだし、幼馴染は俺のために用意されたはずの料理を平らげていく。つまりまあ、祝福されている感じがまったくしないわけだ。

十七歳の誕生日。

大人として扱われる記念日。

「ロンさん、手が止まっていますよ?」

「はいはい、悪うございましたね」

顔を上げて催促してくる幼女に俺は適当な返答をしながら苆を食べさせる。ティアとハートレット姉妹が誕生日を祝ってくれると言ってくれたときは普通に嬉しかったんだけどなあ。どうしてこうなったんだろう?

それぞれが満足したところで誕生日会は幕を閉じ、それから俺は師匠と着物姿の美女に引き連れられて酒屋へ向かった。わざわざ場所を変えたのは酒樽が空になったからではなく、ティアの旧友との待ち合わせが今夜だったからである。そんな場に部外者が参加していいのか甚だ疑問だが、美女二人が俺の進言を聞き入れるとは思えないので黙っておく。訪れたのは平凡な大衆店で、まさか火の魔王が来るとは誰も思わないだろう。

「いらっしやい」

雰囲気のある女店主が上品な声で迎えてくれる。着物姿の美女は店内を見回して目的の人物を見つけたらしく、軽く右手を掲げてから奥の席を目指して歩き始めた。そちらへ視線を向けて俺は驚愕する。長い黒髪を手で押さえながら焼き魚を食べているエルフ族——常闇の魔女ことアーシエス・バラライカがそこにいた。

「にやにやにや、世の中は狭いにやあ」

師匠が珍しく的確な表現を口にする。こちらに気付いたアーシエスは薄い笑みを浮かべた。俺は駆け寄るように距離を詰めて疑問符を投げかける。

「どうしてこんなところにいるんだよ？」

「ティアとの待ち合わせがあったからに決まっているじゃない」

「一年後の祭典で感動の再会を果たすんじゃないかったのか？　こんな中途半端な時期に会っちゃうし、もっと成長した俺を見せたなかったのにさ！」

本当に物語の流れというか空気を讀まない奴だ。

「あらあら、ラズエルくんは私に会いたくなかったの？」

「会いたかったさ！　でもそれは酒屋で焼き魚を頬張ってるところじゃなくて、もっとこう感動的な場面で再会を果たしたんだよ！」

「例えば海亀の産卵中とか？」

「違う！　それは感動的な場面が背景にあるだけで感動的な場面じゃない！」

「随分と腕を上げたじゃない」

「ここで褒められても嬉しくねえよ！」

俺とアーシエスの会話を師匠と着物姿の美女は無言で見守っていた。普通に恥ずかしい。それから四人での会食が始まり、アーシエスとティアの再会を祝うことになった。卓の上には麦酒から葡萄酒、度数の高い蒸留酒まで並べられている。料理も肴になりそうな一品が豊富に揃っていた。

「酒と一緒に楽しめる仲間がいることは素晴らしい」

「昨日の夜からずっと宴会にゃ」

「酒を飲むのは構わないのだけど、ティア、例の件は大丈夫なので
しょうね？」

上機嫌な着物姿の美女を常闇の魔女が窺める。

「協力には感謝しておるが、彼奴^{あやつ}だけは我の手で屠る」

「竜族の裏切り者は竜族で始末するということかしら？」

「そういうことにしておこう」

魔王の魔王による魔王のための意味深な会話だった。

頃合いを見て俺は店を出る。しばらくすると常闇の魔女も外へ出てきた。

「魔王同士に繋がりがあるとは思ってたよ」

「ほとんどの魔王は縦の関係に強くて横はさっぱりだからね」

夜でも明るい商業地区の通りを歩きながら言葉を紡いでいく。

「一年後の祭典、やはりなにかあるのか？」

「なにもないと言えば嘘になるでしょうね。でもそれは魔王側の問題で下僕であるラズエルくんには重要な事柄じゃないわ」

「下僕は塔に巣食う盗賊を倒したり王に頼まれた黒胡椒でも探しておけと？」

「まあ、大体そんなところね」

「否定しろって！」

「冗談よ」

そこでアーシエスは神妙な面持ちになった。こちらも自然と背筋を伸ばしてしまう。

「契約の内容を覚えてる？」

「もちろんだ。忘れられるような内容じゃないだろう？」

潜在能力を極限まで引き出せる代わりに俺の命は常闇の魔女に握られている。しかしこれは性質を考えれば当然のことで、契約者を従わせるための常套手段と呼ぶべきだろう。もし足枷がなければ魔王を裏切るかもしれないわけだからな。

「どうして私に命を預けられたの？」

「アーシエスになら殺されてもいいと思ったからだよ」

実際に俺、前世で一回殺されてるからな。
常闇の魔女は満足そうに微笑む。本当にどこの世界でも変わらないよな。

「一つ質問してもいいか？」

「なにかしら？」

「ティアが竜に変身したみたいにな、ほかの魔王も姿を変えたりするの？」

「私は第三形態まで変身が可能よ」

「すげえ！」

「冗談よ。子供みたいな喜び方をしないで頂戴」

絶対零度の視線が返ってくる。本気で怖い。だから俺は本題を切り出すことにした。

「やるべきことがあるなら教えてくれ」

「それより先に伝えておかなければならないことがあるわ」

「なんだよ？」

問い返す俺の言葉にも緊張が浮かぶ。アーシエスは口の端を上げて囁いた。

「誕生日、おめでとう」

それから表情を引き締めて語を継ぎ足す。

「祭典前に竜の亡霊を葬り去らなければならぬわ」

鳳凰曆七一五年。

白い紗幕の交差した薄暗い室内。その奥に控える寝台の上には人影があった。

若干二十二歳にして国王に就任し、僅か五年でラズマタズ教国に革命をもたらした、アレク・デルタ・アシュビーその人である。そこへ忍び寄る別の人影。音を立てないように慎重に歩を進める。寝台の傍らに來ると、懷から小刀を取り出した。すやすやと眠っているアレクにそれを突き立てる。しかし刺さる直前で寝返りを打たれ回避された。

「くっ」

寝具から小刀を引き抜き改めてアレクを狙おうとしたときだった。

「暗殺に二度目はないよ」

アレクは素早い動きで刺客の腕を掴み寝台へ引き込んだ。身体を反転させて馬乗りになる。そのまま激しく抵抗しようとする刺客を制圧した。随分と音を立てたからだろう、室内の異変に気付いた近衛兵が声をかけてくる。

「アレク様、なにか御座いましたか？」

「どうやら鼠が迷い込んで来たらしい。悪いが部屋を明るくしても
らえるか？」

「ははっ！」

近衛兵が端末を操作すると、寝室内の発光管が青白く輝いた。アレクの顔に驚きの表情が浮かぶ。取り押さえた刺客は黒髪に黒い瞳の若い女だった。よく知らない異国の装束を身に纏っている。

「必要であれば我々が鼠を捕らえましょうか？」

「ありがとう。しかしその必要はないよ」

「了解致しました」

アレクは近衛兵の質問に応じると刺客の観察を再開する。どうも女の格好に見覚えがあるのだ。ぼんやりと思い出した名称を言葉にしてみる。

「遙か東方に位置する国の暗殺と諜報を得意とする忍者——女はくノ一だったかな？」

「殺しなさい」

くノ一は躊躇いもなく言い放つ。それから常套句のような恨み言を紡いだ。

「だけど覚悟しておくことね。あなたが国王である限り新たな刺客が命を狙いに来る」

「僕の心配をしてくれてありがとう」

怜悯な視線を向けてくる女忍者にアレクは柔和な笑みを返した。しかしその瞳には悪意が含まれている。まず女刺客の手首を捻り上げて小刀を放させた。それを足で払って寝台の上から弾き落とす。両手を押さえつけたままアレクは優しい声で宣告した。

「君は僕より己の心配をすべきだね。捕らえられた刺客がどうい

目に遭うくらい知っているだろう？　しかも君は女だ。あんまり僕の機嫌を損ねないほうがいい」

「卑劣な……それでも一国の王か？」

「一国の王だからこそ温情をかけられるんだよ。君は美しい。素直に従えば飢えた男の群れに裸で放り出すような真似はしないさ」

ゆっくりとアレクはくノ一の唇を奪った。腕力だけでなく脅迫までされては抵抗できるわけがない。しばらくすると若き王は唇を離して囁いた。

「可愛いよ」

言いながらくノ一の腕を押さえていた右手を動かして女の頬を撫でる。それから緩やかに下へ向かい柔らかな胸に触れた。自然と女の頬が紅潮する。恥ずかしさなのか屈辱なのかは判然としない。アレクの魔の手は忍び装束の中にまで及んだ。思いのほか大きな胸が掌の中で弾む。

「……あ……」

くノ一の唇から甘い吐息が漏れた。アレクは悪魔のような笑みを浮かべる。

「ようやく素直になってきたね」

再び唇を重ねようとしたとき、くノ一の口から冷静な言葉が放たれた。

「ねえ、これってアレクは楽しいの？」

「とても楽しいね」

アレクは押し倒したままの女忍者に微笑みかける。

「レノアは楽しくないのかい？」

「楽しかったわよ。詳細に設定を決めて刺客ごっこをしているときはね」

言い終えるとレノアは深い溜め息を吐く。不満げな態度にアレクは慌てて取り繕った。

「愛する二人にも変化は必要だと思うんだよ。特に長女のミシエルが生まれてから、レノアはお姫様の相手ばかりしているからね。もう少し夫である僕も構ってもらいたいのださ」

「それはわかっているんだけど、普段より興奮して鼻息が荒いのはなぜなの？ くノ一の衣装を着ただけなのに、アレクの瞳が爛々に輝いていたのはどうしてかしら？」

「そ、それはだね。えーと……つまり、その、なんだ」

じとつとしたレノアの視線にアレクは超高速で顔を逸らせた。

「そう言えばさ、どうして東方装束がここにあるわけ？ まさかこのために取り寄せたとかじゃないわよね？」

レノアの詰問。アレクは萎縮する。

「国民の血税を自身の欲望を満たすために使うなんて最低を通り越して人族失格よ」

「違う違う！ わかった、正直に白状するよ」

レノアの胸元に差し込んでいた右手を抜いて、アレクは嘆息を漏

らしながら仰向けに寝転がった。枕代わりに頭の後ろで両手を組む。

「東方の国から使者が来てね。貿易船の燃料補給をしたいと言うから許可してやったんだ。そしたら勝手に数種類の民族衣装を置いていったんだよ。それを部屋に放置していたらレノアが着てみたいと言いついて、それでこういうおかしい展開になったんじゃないかな？」

「昔、女諜報員とか女暗殺者に憧れてた時期があったのよ」

数瞬だけ遠い目をしていたレノアの顔が急速に赤くなる。アレクは立場逆転の機会を見逃さなかった。

「せっかく二人きりなんだし、ここは仲直りの意味を込めて夜の営みでもしようか？」

「……少年のような瞳で言わないでよ、断り難くなるから」

「断る気なんてないくせに」

アレクの意地悪な言葉にレノアは顔を背けて口を尖らせた。

「あらら」

若き国王は失言を認めるかのように鼻先を掻いた。それからご機嫌斜めな妻にとぼけた口調で囁きかける。

「あー、言い忘れていたことがあった」

「……なによ？」

レノアは背中を向けたまま問い返した。その背中にアレクの優しい声が届く。

「愛している、世界中の誰よりも」

かつて大戦の開始に吹かれたという伝説の角笛ギャラルホルンが描かれた赤い旗――ラズマタズ教国の国旗が最奥の壁に掲げられていた。その下に議場が広がっている。議席には正装の文官や将軍が難しい顔で並び、それぞれ秘書官たちが周囲を慌しく行き交っていた。

「陛下、今なんと仰いました？」

「却下。わかりやすく説明すると『その案駄目だぞー』ってことだね」

玉座から軽口を叩くアレクに、事実上ラズマタズ教国の二番手であるアンタレス教皇は苦々しい表情を浮かべた。隣に座る部下に修正案を作成するように命じる。要人の一人が次の議題について説明を始めた。

「国民の八十八・二パーセントが読み書き可能になっております。これは五年前に比べ五十パーセントの向上、さらに犯罪発生率の低下にも繋がっております。尽きまして――」

「採用」

「陛下！ まだ話の途中ですぞ！」

理不尽な判決が下され続けることに、とうとうアンタレスは立ち上がり抗議していた。高齢の老体とはいえ教皇にまで登り詰めた男の怒声は、要人たちを震え上がらせるほどの苛烈な迫力があつた。しかしアレクは動じない。まるで叱責されたのが他人であるかのような振舞いを見せた。とはいえ返事は必要と判断したのだろう。一

拍後、若き王は悠然と立ち上がり静かに語り始めた。

「軍事力を縮小し、その予算を教育と医療に用いる。僕が五年前に採用した議案だ。あのときのことを思い出してほしい。議会は国民を守れない国家に成り下がると議案に対して猛反対した。二年から三年のうちに他国の干渉を受けるという見解もあったかな。しかし五年経った今でも我が国は独立国家を維持している」

「陛下、よろしいでしょうか？」

饒舌なアレクに釘を刺す声が上がった。若き国王は視線を声の主へ移してから首肯する。

「もちろんだよ、最高軍事司令官殿」

「陛下の想い描く国家が実現すれば、まさに我々の望む理想郷でありましょう。しかしそれは頭の中で描かれた世界ではありません。安全かつ絶対に傷付かないところで思考された夢の世界。ところが現実とは違います。戦場の最前線に立たされる兵士たちは、いつ敵国に攻め込まれるかと戦々恐々なのです。現状の武力では戦争にもならないでしょう。各国が最新兵器を開発実用化している中、我が国は五年前より退化し続けているのですからね」

「グラットン司令殿、いくらなんでも口が過ぎるのでは？」
「構わない、続けてくれ」

非難の声を制して、アレクは先を促した。恭しく頭を下げてグラットンが続ける。

「陛下の理想は高く、この国を変える救世主に成り得るかもしれませんが。しかしよくよく考えてみてください。もし陛下一人で救えてしまうような国なら、それは陛下以外を必要としない糞っ垂れな国だと証明するだけです」

「いい加減にしろ！　そのような暴言許さんぞ！」

アンタレス教皇が机を叩いて激昂した。どよめきが議場に広まる。グラットンの演説は進言の範疇を逸脱しており、明らかに喧嘩を売っているようにしか思われなかったからだ。しかも富国強兵推進派を煽り立て謀反を企てるつもりかと疑われても仕方がない内容である。

「確かにグラットン司令殿の進言は無礼でしょう。しかし苛烈な生存競争を勝ち抜くためには、武力を切り捨てられないのも実情であります。陛下は戦争が起こったとき、武力以外の手段を用いて他国の脅威から国民を守る案をお持ちか否かをお聞きしたい」

要人の一人が口火を切った。耳が痛くなるような静謐を若き国王の声が裂く。

「勝ち目のない戦争はしない」

アレクの瞳には強い意志が宿っていた。しばし気圧された要人だが、それでは解決にならないと反論する。大きく息を吸い込んだ若き国王は決然と言い放った。

「負けるが勝ちという諺がある。戦争を起こした場合、自国と相手の生産力は極端に低下する。その中で物資や資金を大量に消費しなければならず、結果として第三者たる隣国や同盟国が富むことになる。それに戦争で勝利しても手に入るのは疲弊した領土だけだ。周辺国の脅威に曝されることになるし、終戦直後の国力は戦争開始前を下回る可能性が高い。ここまで異論はないかな？」

要人たちの顔を見回したあと、一人納得したようにアレクは語を

継ぎ足した。

「例えば統治者を挿げ替えるだけで戦争を回避し、現状の暮らしを維持できるとしたら、それはそれである種の勝利にならないだろうか？ 国民視点に立って平和を考えれば簡単なことだ。国民にとって国王が誰であるかは重要なことじゃない。問題なのは安定した暮らしと戦争の起こらない平和な環境だからね。私の命と引き換えにラズマタズ教国を貴国の自治区として扱ってほしいと願い出たとして。一切の被害を出さず一国が手に入る。戦争による損害を逆手に取れば、案外あっさりと承認される気がするんだよね。自治権を認めても自国の領土が増えることに変わりはないわけだからさ。それでも戦争を起こしたがるような先見の明がない国なら諦めるしかないけど——」

「正気ですか？」

鋭い眼光でアレクを射抜いたのはグラットン司令である。

「残念ながら正気だ。私の理想のために皆の命をくれと言うつもりはない。賭けるのは私の命だけで十分だ」

議場の雰囲気が変わった。ざわざわと不穏な空気が漂う。

「それはつまり——我々に陛下を売れと申しているのでしょうか？」
「端的に言うとなさなるな。保身のために王を売るような腰抜け連中なら謀反の心配もないだろうと敵国に安心感を与えられるかもね」

空気が張り詰めた。

「確かに理論的に考えれば敵国に戦争を起こす利益がなくなる」
「一人の犠牲者で現状を維持できる妙案」

議場がアレクの策を認め始めたとき、机を激しく叩いて一喝したのは、憤怒の表情を露わにしたアンタレス教皇だった。

「静まれ馬鹿どもが！ 国王を差し出して保身を図るなど恥を知れ！ 陛下もお戯れが過ぎますぞ？ 我々の命は陛下に預けているのです。どうぞ懸命なご決断を」

恭しく一礼するアンタレス教皇に、アレクは反省の色を微塵も見せずに答えた。

「ならばその預かっていた命を返却しよう。では次の議題に進んでくれ」

呆氣に取られた教皇を横目に、要人の一人が次の議題を切り出していた。会議は滞りなく進行し、予定の時刻に終了する。要人たちが退室していく中、アンタレス教皇がグラットン最高軍事司令官を呼び止めた。珍しい組み合わせである。誰かに聞かれると困る内容なのか、皆が出払った議場の隅でアンタレス教皇は切り出した。

「グラットン殿、陛下への発言について教えて頂きたい。なにか意図があったのか？ それとも――」

「陛下を疎んじているアンタレス教皇に忠言されるとは思いませんでしたな」

発言を遮るようにグラUTTONは陰惨な笑みを浮かべた。

「ふざけるな！ どのような人物であろうと主君に忠誠を誓うのが臣下たる務めだ。二心は許さんぞ。返答次第では軍法会議にかける」

怪訝そうにアンタレスの表情を覗き込んで、しかし次の瞬間、グラットンには柔和な笑みを湛えていた。まるで心が入れ替わったかのような変化である。

「どうやら賢しい芝居ではないらしいな」

「当たり前だ！ 一体なにを考えている？」

「王族と教会の不仲は折り紙付きだからな。真意を話すつもりはなかったんだが――まあいい。少しだけ俺の昔話を聞かせてやろう」

遠い目をしてグラットンは顎鬚を撫でた。アンタレスは無言のまま聞き入る。

「戦の最前線は常に非常だ。弱い奴から死んでいく。他人を信じた奴も死ぬ。殺し合いに感情は不要。俺たちは敵国の王を追いつめる駒の如く扱われるだけだった。そこから抜け出す術は一つしかない。武功を収めて上に這い上がる。最前線に立ちたくなければ、後方から指示を飛ばすだけの指揮官になるしかなかった。つまらん人生さ」

グラットンの凄惨な過去にアンタレスは息を飲んだ。人命の尊さを訴える教会が愚かしくさえ思えてくる。眼前の人物が急に大きく感じられた。

「ある日、ふと思ったのだ。俺たちが命をかけて戦っているとき、守るべき王は何をしているのだろうかとね。美味い酒を飲んでいいのか、女を抱いているのか、それとも前線で戦う俺たちを気にかけてくれているのか？ 意味のない詮索だ。答えがなんであろうと俺たちは戦うしかない。王の価値など駒にはどうでもいいことだ」

言ってからグラットンは苦笑する。

「王にとって駒の命などさらにどうでもいいことだろう。アンタレス教皇、俺は知りたいのだ。百万人の命を犠牲してまで守らなければならぬ命など存在するのだろうか？」

アンタレス教皇はなにも答えなかった。いや、答えられなかったのである。

「その逆も然りだ。たった一つの命で救われる百万の命などありはしない。いや、あってはならないのだ。もしそんなことが可能であるなら、俺は死んでいった仲間たちにかける言葉を失ってしまう。自らの命が国の礎になったと信じている仲間たちに、人の命は等価ではないと残酷な現実を告げろというのか？」

鬼の形相を象るグラットンに、アンタレスは深い哀しみを覚えた。

「されど貴殿は待ち望んでいたのではないか？ 国民のために自らの命を賭けるような主君を、武力以外で争いを封じられる理想郷を――」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510x/>

魔王な彼女に虐げられるのはいつも俺

2011年11月8日19時35分発行